

## 『道草』における健三の生の描写

### はじめに

『道草』の前景で描かれているのは金が支配する日常世界の中で生きねばならない健三の苦渋に満ちた生のありようである。『道草』の後景には健三の過去から未来へと繋がっていく生の軌跡が描き込まれており、その軌跡が現在の健三の生の意味を浮かび上らせている。『道草』の語り手は、金の圧迫によって苦しむ健三の姿を、「金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入<sup>はい</sup>つて来るにはまだ大分間があった」と描いている。このことは、『道草』の語り手が、その「真に偉大なもの」を掴んでいる視点から健三の生を描いていることを示している。

本稿では、『道草』の語り手の位置（金の力で支配出来ない真に偉大なもの」の内実）と、健三の生の意味（前景で描いている健三の生のありようと、後景に描いている健三の生の軌跡）との関係を考えてみたい。

### 1

学生生活に自分の全存在を捧げている健三の前に、かつての養父鳥田が現われる。鳥田の出現によって、自分の暗い過去と向き合わねばならなくなった健三は、二十九回で「青春時代を全く牢獄の裡で暮<sup>く</sup>した」と青年に語る。「牢獄とは何です」との青年の問いに、健三は次のように応える。「学校さ、それから図書館さ。考へると両方ともまあ牢獄のやうなものだね」「然し僕が若<sup>も</sup>し長い間の牢獄生活をつげなければ、今日の僕は決して世の中に存在してゐないんだから仕方がない」「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰<sup>つま</sup>らないね」と。

語り手は、その時の健三の内面を次のように描いている。

過去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、其現在の自分の上に、是非共未来の自分を築き上げなければならなかつた。それが彼の方針であつた。さうして

田中邦夫

彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれども其方針によつて前へ進んで行くのが、此時の彼には徒らに老ゆるといふ結果より外に何物をも持ち来さないやうに見えた。それは何故であろうか。まず、この問題から考えていこう。

この時健三は学生時代の勉学生生活を「牢獄」と感じ、その上に自分を築き上げねばならないと考えている。しかも、その方針に従うことが「此時の彼には徒らに老ゆるといふ結果より外に何物をも持ち来さないやうに見えた」にもかかわらず、彼はこのような生活を維持しようとしている。それは何故であろうか。まず、この問題から考えていこう。

健三が学生時代に「牢獄」生活を送つたと感じていた理由は、彼が少年時代の「酷薄」な世界から脱出するための努力を自分に課したという九十一回の回想のうちにある。

——養父母が離婚した後、健三は実家に引き取られたが、籍は戻らなかつた。実家の父は「殆んど子としての待遇を彼に与へなかつた」。養父島田は健三が一人前になつて働けるやうになれば、「此方へ奪還くつてしまへば夫迄だ」という態度であつた。現在の健三が回想する当時の自分は実父にとつても養父にとつても、人間ではなく物品であつた。あるとき養家を訪問した健三に養父は「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」といった。「酷薄といふ感じ」が健三に「淡い恐ろしさ」を与えた。この時健三は「給仕になんぞされては大変だ」と心の内で繰り返し、「立派な人間になつて世間に出なければならぬ」と決意し、

その努力の結果「給仕にならずに済んだ」のである。

この回想によれば、学生時代の健三は、自分の育つた環境から抜け出すために、勉学に精を出した。その結果今の健三は大学に籍を持つ教師・学者という社会的地位を得たのである。四十七回の健三は、自分と島田とは「魚と獣程違ふ」と口にしている。この健三の言葉には、彼が得た現在の社会的地位を意識することで、自分が島田とは別世界に住む人間であることを確認しようとする気持ちが込められている。

にもかかわらず健三は現在の社会的地位をつくり出した学校や図書館での誇るべき勉学生生活を「牢獄」と感じている。

それは学校や図書館での勉学が、健三にとつて酷薄な過去の世界から脱出するための手段であり、その努力の目的が彼の内部にある自分の欲する生き方とは異質であつたからである。後に見るように、彼は学生時代の最後に、自分の欲する生き方を得ようとしたことがあつた。しかしその道は困難であり、中断しなければならなかつた。学校卒業後教師となり、さらに官費で外国に留学して大学での職を得た健三は、成果をあげねばならなかつた。それは、彼にとつて、義務でもあつた。健三は、学問への「異様の熱塊」を自己の内部に感じていたにもかかわらず、「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」と青年に語らねばならなかつた。それは、大学に籍を持つ学者という社会的地位を得た今でも、学問とは異質な理想への希求が彼の今の学者としての生き方に逆し續けているからである。

にもかかわらず健三は今の学者生活を維持し続けようとしている。それは過去から抜け出すために努力して得た現在の社会的位置が、過去から彼を自由にし、かつ現在の彼の生を保障してくれるからであった。

## 2

健三は過去から脱出するためにつかみ取った現在の生のあり方を「牢獄生活」の延長と感じている。その理由は単に学究生活に対して、それとは異質な理想が彼の内部で反抗していたからだけでなく、語り手によれば、学者としての生活が彼の日常意識に歪みを与えていることを健三が感じているからでもある。

第三回の語り手は、健三の内面を次のように描いている。  
——健三には学問に「異様の熱塊」があり、学問にすべてを捧げるのが自分の「本来」の姿なのだとする意識があった。  
——しかし語り手はその健三を次のように描き出している。  
彼は「索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて」行くことになるが、「温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた」と。この語り手の描写は、学問にすべてを捧げる生活を、自分の本来の姿だと感じながらも、その意識の奥底では今の学究生活が自分の望む生のあり方ではないと健三が感じていることを示しているのである。

第十回では、日常生活における健三の思考の歪みが、次のように描かれる。——健三は風邪を引き細君の世話を受けた

が、熱の下がったとき、細君から、彼が熱に浮かされていた時、「彼方へ行け」「邪魔だ」と口にしたことを聞かされる。細君は平生からそう考えていなければ、そんなことをおっしゃるはずがないと言つて下を向いた。しかし健三は「熱に浮かされた時、魔睡薬に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思つてゐる事ばかり物語るとは限らない」という論理で細君を押さえつけたのである。この場面で語り手は、「彼は論理の権威で自分を侘つてゐる事には丸で気が付かなかつた」と健三の「学問」的論理を批判的に浮彫りにしている。

『道草』では、右のような日常生活における彼の「学問」的論理の歪みが詳細に描かれる。語り手は、健三が希求しながらまだ掴むことが出来ない境地を既に掴んでいる存在であり、その立場から、健三の論理思考をカリカチャーしながら、その制限を描き出している。『道草』の前景では、このよう  
な健三の現在の生のありよう——学究生活による思考の制限——が語り手の立場から批判的に浮彫りにされ、やがてその制限に気づき出す健三の姿が描かれていく。

## 3

健三は、感情の爆発に苦しむことがしばしばあった。その感情の爆発は何に起因しているのであるか。結論を先取すれば、健三はそれが金の圧迫によると感じているのである。そして健三はその苦痛から脱するために、論理的思考では捉

えることの出来ない「何か」(「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」)を希求せざるを得ない自分を感じている。以下語り手の描く、健三の感情の爆発の原因、およびその苦痛からの脱出の希求を見ていこう。

五十七回の前半では、健三の発作的行動に焦点が当たる。彼には人との平静な会話が必要であった。しかしそれを得ることが出来ない彼は、心の鬱屈を行為として外に吐き出さずにはおれなかった。彼は①子どもを育てている草花の鉢などを蹴飛ばした。②保険の勧誘員が来たりすると、取り次いだ下女を大声でしかり飛ばした。

語り手はその時の健三の内面を①では次のように描いている。

彼は半ば自分の行為を悔いた。然し其子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。／「己の責任ぢやない。必竟こんな氣違じみた真似を己にさせるものは誰だ。其奴が悪いんだ」

②では次のように描いている。

彼はあとで自分の態度を恥ぢた。(中略)同時に子供の植木鉢を蹴飛ばした場合と同じやうな言訳を、堂々と心の裡で読み上げた。／「己が悪いのぢやない。己の悪くない事は、仮令あの男に解つてゐなくつても、己には能く解つてゐる」

①の「其奴」②の「あの男」とは、衝動を引き起こす内部の要因を指している。<sup>(注1)</sup>健三の自意識は、その衝動をコントロー

ルすることが出来ない。その結果として、健三は、「己の責任ぢやない」、「己が悪いのぢやない」と、衝動を引き起こす要因と、彼の自意識とを区別し、自己意識を弁護する。しかし語り手は、その健三の自意識の自己弁護をも「弱さ」として描き出している。ここには衝動的行動をコントロールできない健三の自意識を、突き放して見詰めている語り手が存在している。

自己の衝動的行為をコントロール出来ないこの苦しみは、健三に自意識を超えた超越存在を希求させる。しかし、語り手は、その時の健三の気持ちに次のように描いている。「無信心な彼は何うしても、『神には能く解つてゐる』と云ふ事が出来なかつた。もし左右いひ得たならばどんなに仕合せだらうといふ氣さへ起らなかつた。彼の道徳は何時でも自己に始まつた。さうして自己に終るぎりであつた」と。語り手によれば、健三と神との関係は次のような関係にあつた。

神という存在を信じて出来るならば、健三は自己の病的な衝動を、神の与える試練として合理化できるのであるが、しかし個人主義(「自我の絶対化」)を標榜していたその時の彼は、その病的な衝動を引き起こす要因とその責任をも自我のうちに求めねばならなかつたのである。

ここで語り手は、自意識ではコントロールできない苦しみから脱するためには、己の自我を超えた超越的存在の必要性を感じている健三の意識を描いている。語り手は既にその超越的要素を掴んでいる立場から、徹底した自我主義を標榜し

ていた当時の健三の自意識の苦しみや制限を描きだしているのである。

それでは、語り手は病的な衝動を引き起こす要因を何に見ているのであろうか。

留意すべきは、この病的な衝動に苦しむ健三の姿に続いて、次のような健三の連想が描かれていることである。

彼は時々金の事を考へた。何故物質的の富を目標めやすとして今日迄働いて来なかつたのだらうと疑ふ日もあつた。

(中略) ②彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた。①自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮らし向に悩んでゐるのを気の毒に思つた。極めて低級な慾望で、朝から晩迄齷齪あくせくしてゐるやうな島田をさへ憐れに眺めた。／＼③「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外には何にも欲しくないのだ」／＼斯う考へて見ると、自分が今迄何をして来たのか解らなくなつた。

右の引用は語り手が健三の連想を通して、その病的な衝動が生まれる根本原因が現実世界の金の圧迫に起因していることを示しているのである。以下、このことを具体的に見ていこう。

②において何故健三は今の生活状態を「馬鹿らしく」感じたのであろうか。——彼は過去から脱出するために、勉学に努力し、社会的地位を掴んだ。そのことによって彼は過去から脱出することが出来た。しかし金儲けに縁の無い学究生活は儉約生活を要求した。彼には金儲けの道を選択していれば

成功する能力を持つていたという思い（語り手によれば、「己惚おのぼれ」）があり、その思いは自分の学者の道への選択が誤つていたのではないかという動揺を生みだし、金儲けの生き方を選択しなかつたことを悔いさせるのである。ここには日常生活における金の力の圧迫に動揺する健三が存在する。

③には次のような健三の思いがある。——金に苦しんでいるのは自分だけでなく、幸福であつて欲しいと願う自分の親類達もみんな金に心を碎かねばならぬ憐れな存在なのだ。金を稼ぐ生き方を選択しなかつた自分には、かれらに十分な援助をしてやることも出来ない。島田もまた金に心を奪われた、人間としての本性に目覚めることが出来ない憐れな存在なのだ。——ここには金の力に支配されている身近な親類達の姿と、彼らに十分な援助をしてやれない自分の立場との関係を通して、金と人間の本性との関係を考え続けている健三の姿が描かれている。

④には次のような健三の思いがある。——人の心は金に支配されており、人は金儲けにしか興味を持たない。——このように感じた彼は無力感と孤立感に襲われ、彼の内部では自分の学者の道を選択した生き方に疑念が生じている。

こうして彼は、学生時代の最後の頃を思い出す。現在から学生時代の最後の時期へのこの連想は、彼にとつてこの時が、「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」を得ようとする生き方を目指した時期であつたことを示している。しかしその時の彼は、「真に偉大なもの」を掴むことが出来ず、生活の

ために教師になる道を選択したのである。語り手は、次のように学生時代最後の健三の姿を描き出す。

彼は元來儲ける事の下手な男であつた。儲けられても其方に使ふ時間を惜がる男であつた。卒業したてに、悉く他の口を断つて、たゞ一つの学校から四十円貰つて、それで満足してゐた。彼はその四十円の半分を阿爺に取られた。残る二十円で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚げばかり食つてゐた。然し彼は其間に遂に何事も仕出かさなかつた。

健三における、日常世界での金の圧迫からこの学生時代への連想は、彼が世俗での金の圧迫から逃れるために、学生時代の最後に「何事か」を「仕出か」そうとしたことを示している。この健三の回想によれば、彼は自分の生活のための仕事は最低限にして、「古い寺の座敷を借りて」、「何かを仕出か」そうとした。しかし「彼は其間に遂に何事も仕出かさなかつた」のである。

次いで語り手は、時間を現在に戻し、今に至るまで「遂に何事も仕出かさな」かつた過去の自分を認めなければならなかつた健三の内面を次のように描いている。――彼は「金持になるか」「偉くなるか」の「何方かに中途半端な自分を片付けたくなつた」。しかし金持ちを目指すには既に時機を失しており、「偉くなる」ためには、さまざま煩いを克服しなければならぬが、その原因の根本は金がないことにあることを悟らねばならなかつたと。そして五十七回の最後を次

のように結んでいる。

何うして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入つて来るにはまだ大分間があつた。

ここで語り手は健三の苦しみの究極の原因が金の力の圧迫にあり、その苦しみを乗り越えるためには、「金の力で支配できない真に偉大なもの」を掴むことが必要であつたことを描き出している。健三は学生時代の終わりに「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」を掴むことが出来ず、生活のために教師・学者になり現在に到っている。しかし彼は依然として金に苦しみ続けており、そのため、彼は今でも自分の生き方に疑念を懐き、「何うして好いか解らない彼はしきりに焦れ」、時々感情の爆発を引き起こすのだと、語り手は描いているのである。

\*\*\*

語り手はこの場面では学生時代の終わりに掴もうとした「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」についてこれ以上の説明をしていない。それは健三がやがて「真に偉大なもの」を掴み、『道草』の語り手の境地を持つに至るであろう彼の生の軌跡が『道草』の前景に浮かび上がらないようにするためである。

そこで右に描かれている健三の学生時代に、荒正人の『増補改訂』漱石研究年表』（集英社、昭和五十九年）に載るこの時期の作者漱石の伝記を重ねてみる。

明治二十六年七月十日、帝国大学文科大学を卒業。同年十月に第一高等学校と高等師範学校から、同時に就職口があった。彼は高等師範学校英語嘱託となるが、その条件は週二回出講、手当は年額四百五十円。(荒注に拠れば、月給三十七円五十銭。給費返済として七円五十銭、父への送金が十円、製艦費一割引かれる。)

この荒注によって、『道草』で記している、へ四十円貰つてその半分を父に取られ、残る二十円で生活した」という健三の回想はほぼ漱石の学生時代のこの時期を映したものと見えよう。また「古い寺の座敷を借り」た時期は、明治二十七年十月、菅虎雄の世話で、法蔵院に下宿していた頃を踏まえている。そして健三が「何事も仕出かさなかつた」ことと、漱石が同年十二月二十三日に鎌倉円覚寺の塔頭帰源院で参禅するもその境地を掴むことが出来なかつたこととも重なる。<sup>(注2)</sup>

健三と作者漱石の学生時代との重なりは、健三の「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」とは、禅的な悟りの境地であることを示唆していると考えられる。すなわち健三がこの時「仕出か」そうとしたことは、金の力が支配する「我」を超越した心のありよう(禅的な悟りの境界)を掴むことであつたと考えられる。しかし学生時代の健三はその境地を掴むことが出来ず、その追求を中断し、生活のために教師の道を選択した。その後健三は外国に留学し、大学での職を得るが、しかし彼のうちにはその境地へのあこがれが一貫して存在していた。このような健三の生を貫く軌跡を語り手は『道

草』の後景に描き込んでいるのである。

## 4

九十六回の健三は手切れ金を要求する島田の代理人との会見後、やりかけの学生の答案の採点にとりかかる。しかし彼は「神でない以上辛抱だつてし切れない」とペンを放り出し、往来に飛び出す。金のために働き続けねばならない健三の苦痛を「赤い印気が血のやうに半紙の上に滲んだ」と語り手は描いている。

ここで健三の「神でない以上辛抱だつてし切れない」という言葉の内実について考えてみたい。もし健三に、神に対する信仰やそれに類似した意識があつたならば、「神」をこのやうな文脈に登場させることはしないであろう。この言葉は、健三が生活(金の力)に追い詰められ、自分の自我主義ではいかんともしがたい金の圧力を自覚し、神への信仰に代わる、自我を超える「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」の存在を求めずにはおれない健三の内面を表現している。

九十七回の彼の内面では「御前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」という声があつた。「分らない」という健三に、その声は「分らないのぢやあるまい。分つてゐても、其所へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるのだらう」という。この健三の内面の声は、学生時代の終わりに彼が得ようとして得ることが出来なかつた「何事」かを仕出かすこと(＝生の苦痛を超える悟りを得ること)への強い願望が現在

の健三の内面に存在し続けており、その願望が他者の声となつて彼の意識に上つていゝことを意味している。

こうした健三の内部の声は、健三の自我主義の欠点をも自覚させずにはおかなかつた。

健三はショウウインドウをのぞき込みながら、自分の親族達が皆年を越すのに苦しんでいること、中でも細君の父が一番ひどい事であることを思い浮かべ、次のような細君との会話を思い出す。それは細君の父が貴族院議員の選に漏れると、債権者達が彼を責め、細君の父は遂に相場に手を出し悲境に沈んでいったという話であつた。細君は「相場に手を出したのが悪いんですよ」「御役人をしてゐる間は相場師の方で儲けさせて呉れるんですつて。だから好いけれども、一旦役を退くと、もう相場師が構つて呉れないから、みんな駄目になるんださうです」と言った。その細君の話を聞いて、健三は「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さへ解らない。」という。「貴方が解らなくつたつて、左右なら仕方がないぢやありませんか」と反発する細君に、「何を云つてるんだ。それぢや相場師は決して損をしつこないものに極つちまふぢやないか。馬鹿な女だな」と押さえつけたのである。健三はこの細君との会話を思い出したのである。

右の健三の想起した細君との会話の内容は、健三の自我主義の歪みを如実に示している。細君の話の核心は、細君の父が相場に手を出したため、財を失つたという点にある。しかし健三は、核心からずれたへ相場師は役を退くと構つてくれ

ない」というその真偽にこだわり、その真偽を考えようともしない細君を、馬鹿な女だと罵倒したのである。

この場面の健三は今まで日常世界を裁断する武器であつた自分の論理の歪みを自覚している。その健三の意識にあつては、金の力によつて支配されている世俗世界は、今までとは違つた様相を帯びて映り出す。へ彼には、通り過ぎる人々は一定の目的を持つてせつせと活動しているように思われた。或者は通り過ぎるとき「御前は馬鹿だよ」という顔つきをするように感じられた。

この場面で健三は「御前は馬鹿だよ」という他者の視線を感じている。このことには、次のような理由がある。一つは、歪んだ論理的思考を絶対化してきた自分を、「御前は馬鹿だよ」と感じていることである。ここには、自分の力で勝ち取つたと考へた「現在」が、歪んだものの考へ方をする人間として自分をつくり出しているのだ、という苦い思いを嘔みしめている健三がいる。

もう一つは、世の中の人間は金を得るためにひたすら仕事に精を出す存在なのだ、という思いである。ここには健三の孤立感がある。世俗世界で生きるためには、人は金のために働かねばならないという思いが彼を襲つてゐる。それ故、健三は、その後すぐに家に帰つて、「赤い印氣を汚ない半紙へなすくり始めた」(生活のための仕事である答案の採点に取りかかつた)のである。

「御前は馬鹿だよ」という言葉には、右に見たような、健



三自身の自我主義に基づく論理的思考の歪みの認識と、世俗における孤立感が込められている。

## 5

「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」はまだ健三の目には入っていない。しかし健三はその「真に偉大なもの」に導かれて、自分の天職である文学的創作に目覚めていく。以下百一回で語り手が描く、その有様を見ていきたい。

歳が改たまつた時、健三は一夜のうちに変わった世間の外観を、気のなささうな顔をして眺めた。／「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ。」／（中略）彼は普通の服装なりをしてぶらりと表へ出た。成るべく新年の空気通はない方へ足を向けた。

この場面での「人間の小刀細工」という健三の言葉の背景には、その反対の言葉、「巧匠跡を留めず」（『碧巖録』八十八則の垂示・下語）といった禪語がある。ここでいう「巧匠」とは、森羅万象の動きや人間の運命を司る力すなわち東洋哲学でいう「自然」のことである。

健三の眼には、「冬木立と荒た島、藁葺屋根と細い流」がぼんやりと入っている。語り手は健三の行動を次のように描いている。——「幸ひ天気は穏かであつた。空風からかぜの吹き捲まくらない野面のづらには春に似た霏もやが遠く懸つてゐた。其間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身体を包んだ。」「可憐な自然」のなかに「彼は人もなく路もない所へわざ／＼迷い込んだ。さ

うして融けか、つた霜で泥だらけになつた靴の重いのに気が付いて、しばらく足を動かさずにゐた。」——

語り手は何故自然の中に「わざ／＼迷い込」んでじつとしている健三の姿を描き込んでいるのであろうか。この時穏やかな自然に包まれている健三が、ことさらに描かれていることに注意しなければならぬ。語り手がここで描いていることは、そのとき彼の外側にある「自然」によって彼自身の内側の「自然」（＝健三の意識の奥底にある人間としての根源）が包まれ、外側の自然が彼自身の内側の「自然」（内的欲求

＝文学的創作によって本当の自分を表現したいという欲求の自覚）を押し出したということであろう。語り手は、健三が家に帰る途中で「島田に遣るべき金の事を考へて、不図何か書いて見やうといふ気を起した」と描いている。語り手は「巧匠」（自然）の導きによって、文学的創作に開眼している。健三の姿を描いているのである。しかし健三にはまだこの自覚はない。この「自然」に導かれて、健三はやがて（作者漱石とを重ね合わすならば）論理による学問的追究生活から離れて、文学創作へと転身して、やがて「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」をつかみ取っていくことになる。これが「巧匠跡を留めず」の内容である。作者は暗にこのような自然と健三との関係をそれとなく書き込んでいる。

答案の採点が漸く済んだ健三は新学期が始まるまでの十日間を利用して文学の創作に没頭した。健三の文学創作営為は次のように描かれている。

彼は、猛烈に働らいた。①恰も自分で自分の身体に反抗でもするやうに、恰もわが衛生を虐待するやうに、又己れの病気に敵討でもしたいやうに。②彼は血に餓えた。しかも他を屠る事が出来ないで己を得ず自分の血を啜つて満足した。／予定の枚数を書き了へた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。／「あ、あ、」③彼は獸と同じやうな声を揚げた。

右の描写の表現はややわかりにくい。傍線部①②③は次のような意味であろう。

①「恰も自分で自分の身体に反抗でもするやうに」——健三にとつて文学的創作は生（身体）に執着する我の意識と、その深層にある人間としての根源的意識（人類性Ⅱ「自然性」）との闘いであつた。それはすなわち自己解剖によつて、世俗を支配する金の力と内なる人間（Ⅱ人類性）との闘いを描き出すことであつた。

②「血に飢え」、「自分の血を啜つて満足した」。——禅語「人を殺す」は人に悟りを得させること、「流血」は世俗意識を払拭するという意味で使われる。この場面での入血を啜るVとは、これらの禅語を背景として、自分自身の内面を解剖して、その世俗的要素を抽出するといった意味で使われている。<sup>(注3)</sup>

③「獸と同じやうな声を揚げた」——『道草』では「野性」という言葉がしばしば使われている。『道草』でいう「野性」とは、世間知や教養の影響を受けない、人間の根源的要素を

意味する。この場面での「獸」は「野生」と同意で、「獸と同じやうな声を揚げた」とは金が支配する我（世俗意識）と戦う人間としての根源的意識（Ⅱ「内なる人間」Ⅱ人間性）を作品の中で表現したということであろう。

この場面で語り手は、健三が自然（金の力で支配出来ない真に偉大なもの）の導きによつて、自分自身の意識の分析を通して、金の支配する世俗世界と人間の根源性との関係を追究するという文学的創作へと転身していくきっかけを掴んだことを描いている。しかしそのことに健三はまだ気づいていない。<sup>(注4)</sup>

## 6

次に語り手にはみえているがしかし健三にはまだ見えていない「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」の描写をみておきたい。

百二回で、島田から受け取った百円の受領書と強請に使われたかつて健三が実家に引き取られたときに島田に渡した証文を前にして、健三と細君は次のような言葉を交わす。

「安心するかね」／「え、安心よ。すっかり片付いちやつたんですもの」（中略）「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」／健三の口調は吐き出す様に苦々しかった。細君は黙つて赤ん坊を抱き上げた。／「お、好い子だ

く。御父さまの仰おつしやる事は何だかちつとも分わかりやしな  
いわね」／細君は斯かう云ひ云ひ、幾度か赤い頬ほに接吻し  
た。

右の健三の言葉「一遍起つた事は何時迄も続くのさ」の具  
体的内容は、健三の生の出発点である過去の出来事は「片付  
く」ことはなく、島田への嫌悪感と彼に世話になったという  
感情もまた、健三の内部で生き続けているということである。  
「健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた」という描写には、  
人間は自分の過去と繋がっている人間関係やその記憶は世俗  
的な法律的文言や金の力では消すことは出来ないという健三  
の苦い認識が描かれている。

一方、この場面の細君は、赤ん坊への無私の愛情の中に身  
を置いており、健三の生への苦渋くじふに満ちた世界とは別次元に  
いる。細君の言葉「お好みおっし子だ」。御父さまの仰おつしやる事  
は何だかちつとも分わかりやしないわね」には、健三の苦渋くじふに満  
ちた言葉との対比のうちに、次のような意味を語り手は込め  
ている。——健三は人間の生を苦しみとしてしか認識してい  
ないが、細君は赤ん坊への無私の愛に生きる喜びを感じてい  
る。細君は今「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」に包  
まれて生きている。このことに健三はまだ気づいていない。<sup>(注5)</sup>  
——この場面で語り手は、「金の力で支配出来ない真に偉大  
なもの」の内実を描いているのである。

## 7

『道草』の語り手とは、生死の意識と繋がる我（個別性）  
へのこだわりから抜け出し、普遍性（人類性≡全体性）との  
関係のなかで、主人公の我（個別性）の意識を客体化して描  
き出す視点である。別言すれば、「自然」と融合した意識  
（禅的境界）ということが出来よう。<sup>(注6)</sup>

ここでは九十一回の語り手の視線を通して、『道草』に顕  
現している「真に偉大なもの」（「自然」）の視線の内実の  
一端を見ておきたい。

九十一回の語り手は、健三の思い出したくない、実父と養  
父の自分に対する酷薄な態度の回想を描き出した後、健三の  
現在の意識の描写に戻り、「然し今の自分は何うして出来上  
つたのだらう」と「不思議でならなかつた」とする健三の気  
持ちを描いている。この時健三は自分の生を導いている何か  
を感じている。しかし健三はその存在を掴むことが出来ない。  
この場面で語り手はそれが「金の力で支配出来ない真に偉  
大なもの」（「自然」）であり、その自然の力に二つの側面  
があることを示唆している。一つは健三の現在を創り出して  
いるが、しかし健三には気づかない側面。もう一つは「自然」  
に導かれて健三が創り出したものを、健三が自分の力によっ  
て創り出したと考えている側面である。（語り手によれば、  
健三は「自然」に導かれて行動しているのであるが、彼はそ  
のことに気づかない。<sup>(注7)</sup>）

語り手は健三の意識に映る、健三の気づかない「自然」の創り出した側面を次のように描いている。

其不思議のうちには、①自分の周囲と能く闘ひ終せたものだといふ誇りも大分交つてゐた。さうして②まだ出来上らないものを、既に出来上がったやうに見る得意も無論含まれてゐた。／彼は過去と現在との対照を見た。

③過去が何うして此現在に發展して来たかを疑がつた。しかも④其現在のために苦しんでゐる自分には丸で気が付かなかつた

右の描写において語り手は健三の意識に寄り添いながら、健三の感じる「不思議」という思いの内実を批判的アクセントを付して浮彫りにしている。以下、その批判的アクセントを通して、語り手が浮彫りにしている「不思議」という健三の思いの内実（自然の創り出した側面）を考えてみたい。

①「自分の周囲と能く闘ひ終せたものだといふ誇りも大分交つてゐた」という言葉に内包する批判的アクセントの内実を取り出せば、次のように言うことが出来る。——健三は自分の周囲との闘いによって、自分の現在を勝ち取つたという自負を持っている。健三には、現在を作り上げてゐる二つの側面のうち一面しか意識できない。島田夫婦や実父は健三に何時も「酷薄」であつたわけではない。養父母は幼児であつた健三を彼らなりに可愛がりもし、世話をしてくれたのだ。実父は健三の将来を気遣い、養育料を島田に払つて健三の籍を実家に戻すために努力し、健三の将来のためにその証文も

残してくれた。学校にやつてくれたのも実父ではないか。夫婦の世話も受けた。こうした周りの人たちの御蔭で健三の現在があるのだ。しかし今の健三にはそれらのことが意識されない。

②「まだ出来上らないものを、既に出来上がったやうに見る得意」には次のようなコメントが存在している。

——今の健三は五十七回で苦しんでいるように、「金持になるか、偉くなるか、二つのうち何方かに中途半端な自分を片付けたくなつた」が、「何うして好いか解ら」ずに「しきりに焦れ」ている存在ではないか。また彼の願望は「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」の境地を得ることにあるが、今の健三はその努力もしていない。彼はまだ人間として不十分なのだ。

③「過去が何うして此現在に發展して来たかを疑がつた」には次のような語り手の健三に対するコメントが存在している。——健三は自分の現在を、あたかも自分の力で勝ち取つたような気がして、過去から現在に至る流れを振り返っている。しかし彼がぼんやりと感じているように、この時の健三の意識に上っていない様々な要因（健三が意識していない側面）もまた現在の健三をつくり出しているのだ。そしてその要因をつくり出している「何か」（彼の外にあつて、彼を導いている力、すなわち「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」）によって彼は動かされているのだ。健三はぼんやりと感じているその存在を悟るべきなのだ。

④（「其現在のために苦しんでゐる自分には丸で気が付かなかつた」）には次のようなコメントが存在している。――健三の過去から現在をつくり出した諸要因は、現在の健三にとってプラスとマイナスの二面性を持つ。しかし現在の健三にはそのマイナス面が意識されていないのだ。

右のように、語り手は健三の現在の意識に批判的アクセントを付した上で、さらに健三の「現在」のプラス面を次のように記していく。

彼と島田との関係が破裂したのは、此現在の御蔭であつた。彼が御常を忌むのも、姉や兄と同化し得ないものも、此現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのも亦此現在の御蔭に違なかつた。

右の傍線部を付した「現在の御蔭」とは、健三が学校や図書館での「牢獄」生活を送つた結果として勝ち取つた外国留学や現在の社会的地位（大学に籍を置く学者）、それに伴う彼の学んだ西欧の新しい価値や彼の掴んだ「個人主義」という信念を含んでいる。語り手は「現在の御蔭」という言葉によつて彼の勝ち取つた（と感じている）「現在」が過去のしがらみを断ち切り自分の価値観に従つて生きる力として機能していることに、肯定的な光を当てている。もし健三に今の「現在」がなければ、彼は血縁関係や縁者のなかで、自分の意思を貫くことは出来なかつたであろう事を、健三だけでなく語り手も意識している。

その上で語り手はその「現在」のもたらすマイナス面をも、

次のように記している。

一方から見ると、他と反が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた彼は気の毒なものであつた。

ここで語り手は、健三の「現在」が否定的に作用している側面を指摘している。健三は、親類縁者とは良好な関係を保つべきだと自覚している。にもかかわらず、健三は「現在の御蔭」で、自己に固執出来、彼らを批判・軽蔑することも出来る。そのため彼らからは一目置かれ、偏屈な人間として遠ざけられている。こうして健三は彼らと心から打ち解けることが出来なくなつてしまつてゐるのだと。

語り手は、健三が得ようとして得ることが出来ない境地をすでに得た存在である。語り手は、その境地から、この時の健三の「現在」の二面性を描き出している。九十一回に描かれた語り手の立つ「真に偉大なもの」の内実を、要約して示せば次のようにならう。語り手の立つ「真に偉大なもの」の内実とは、健三の現在を創り出している「大きな自然」（宇宙の根源にあつて森羅万象の生成を司つている力）健三の意識の外にあつて彼の生を導いているものと「小さな自然」（健三の個の意識の根源にある人間性）「大きな自然」と繋がつている要素との関係を意識できる視線であり、別言すれば、金の力が支配できる我（個別性）に縛られている具体的生を持つ存在である健三の意識のありようを、「金の力では支配出来ない」人類性（＝自然）との関係で浮き彫りにする視線なのである。

## おわりに

健三の現在は過去からの延長であり、彼の未来はその延長線上に伸びていく。この健三の生の軌跡を創り出しているものとは、健三が捉まえようとしながら、まだ捉まえることのない「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」(「自然」の導きによるものであった。健三の生の軌跡は、その「真に偉大なもの」が視野に入っている語り手の視線を通して描かれていた。この生の軌跡は『道草』を貫いている赤い糸である。しかしこの健三の生の軌跡は『道草』の後景として描き込まれているに過ぎない。それは『道草』ではその前景で描いている、金が支配する日常世界の中に生きねばならぬ健三の我の苦しみに、焦点を当てるためである。この『道草』の構造は、『道草』のテーマが、現実世界における金の力と人間の我(生)との関係にあり、健三の生の軌跡はその関係を浮き立たせる為の背景(内的枠組み)であることを意味しているのである。

## 注

(1) 芳川泰久『漱石論——鏡あるいは夢の書法』(河出書房新社、一九九四年五月)では「其奴」をフロイトのいう「エス」とする。聴くべき説であるが、私見によれば、漱石は連想という手法で、その衝動となっている外的要因を描いていることが注意されねばならないだろう。

(2) この時期の漱石の言動のわかりにくさについては諸説がある(玉井敬之「法蔵院時代の漱石私註」、『夏目漱石論』

桜楓社、昭和五十一年十月)。しかし、『道草』の内容から推測すれば、この時代の漱石の漂泊や苦悩の問題は、漱石が自分のおかれている環境から脱出するための最終決断、教師としての道を進むべきか、それとも自分が大切だと感じる禅的境地(「安心立命」)を得る道を進むべきかという彼の生き方の選択であった可能性が高い。

(3) 『碧巖録』第三十一則に「人を殺さんには須らく血を見るべし」。『槐安国語』巻五頌古評唱第十則「古仏露柱」本則評唱に「就中、最も苦しきは、洞山三頓の棒、江湖参玄の衲子を打殺して流血、裳をかかけて渉るべし」などの用例がある。

(4) 語り手はこの場面で、意識的にわかりにくい表現をしている。それは、この作品では、健三の日常世界における金による苦しみを描き出す事に焦点があり、作者の生の軌跡(「文学論」の完成を放棄して、創作に転向したこと)や禅的世界が、作品のなかでクローズアップしないようにするためである。『道草』での禅的要素は金の力によって苦しむ健三の我を描き出すための枠組といえる。

(5) この描写の背景には『碧巖録』第四十三則「洞山無寒暑」などが、念頭にある。なお、この場面は、重松康雄(「自然という名の(相対)と(絶対)」「漱石」その新たな地平(おうふう、一九九七年五月)六九ページ)で「いわば『愛情そのもの、発現』の生き絵を目前にして、次第に一つの啓示を受けていったに相違ない。」と指摘されているが、この指摘は、本稿のテーマと繋がるであろう。

(6) 禅的境地の「無」を人類性から距離があるとする視点からするならば、『道草』の語り手の視点はやや禅的境地とは異なっているというべきだろう。しかし『道草』の語り

手の悟りの立場は人類性とその根幹にあるところに特色がある。亀山佳明は、『明暗』との関係で、この漱石の宗教的心境を「超個人」と呼び、「個人は自然の内に溶解していながら、しかし当の自己そのものは完全に喪失されてはいない。つまり自己は自己でありながら、自己を超えてしまった状態」とする。(『夏目漱石と個人主義』新曜社、二〇〇八年二月、二四三頁) 卓見である。

(7) 自然に二側面あることは『明暗』百十一回での語り手の自然に対する分析的描写によっても示されている。